令和8年度上天草市歴史講座　講演資料
□日　時　令和8（2026）年11月7日（土）14：00～16：00頃
□会　場　上天草市役所　松島庁舎3階会議室

「上天草の戦争遺産と軍人慰霊像」

10／22版

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク　代表　高谷和生

Ⅰ　はじめに　～戦後81年の諸相～

□**戦後世代としての「私の視点」～近現代考古学との出会い～**
□戦争遺跡保存全国ネットワーク　全国運営委員、空襲・戦跡九州ネットワーク　幹事
□平和憲法を活かす熊本県民の会　代表幹事、菊池恵楓園ボランティアガイドの会
□**熊本県内戦争遺産の調査・研究活動と啓発活動は、両輪の活動**
□活動そのものが「未来への継承」。戦後世代である高谷の「平和継承の活動」
□戦争遺跡は、歴史の遺産であり、忘れてはならない「**歴史事実の厳粛なる遺構」であり、「モニュメント」**
□さらに地域が戦争で失った貴重な人命、地域の自然や文化、そして地域が戦災のあと復興し生きてきた歴史を考えるうえからも、戦争遺跡の調査研究・保存活用は重要
□戦争遺跡・遺産の学び・見学での**「戦争の加害や被害の両面」「東アジア史」視野からの歴史認識の重要性**があり、時代背景や地域特性に関する基礎的な学びの保証が必要
□近年、文化財活用論に圧され、全国では単に関心のハードルを下げる手法が多用されるが、**誤用された昭和期の「満洲戦蹟保存運動の反省」**を踏まえ、徹底した**「戦争と平和の学び」の学習保証**と、戦争遺産が**「国民の共有財産・ヘリテージ」であるとの文化財認識**が根底

Ⅱ　熊本の戦争遺跡・遺産

1　戦争遺跡とは

□全国の**戦争遺跡は「約50,000」件、指定登録は「396」件**
（陸軍146件、海軍99件、その他151件）　2026年7月現在
□熊本県内の太平洋戦争期の戦争遺跡総数は、**多数の特殊地下壕を含めた「723件」**
□くまもとの戦争遺産』内の一覧表には**「249件」を精査し記載**
□熊本県内の指定登録文化財は国148件、県383件、
市町村3,382件、国登録文化財156件の計2,382件



資料1　1945年8月10日米軍機市街地空襲。AIと証言でカラー化

2　西南戦争期の指定等　※熊本県による悉皆調査は未実施

西南戦争遺跡群（国指定、熊本市・玉東町）、明徳官軍墓地（熊本市）、七本官軍墓地（熊本市）、花崗山陸軍埋葬地（熊本市）、旧輜重兵六聯隊衛兵所（熊本市）、有栖川の宮御督戦の地（玉東町）、篠原国幹戦傷の地（玉東町）、城の原官軍墓地（南関町）、肥猪町官軍墓地（南関町）、陣内官軍墓地（水俣市）、下岩官軍墓地（和水町）、高瀬官軍墓地（玉名市）、田浦官軍墓地（芦北町）、峰崎官軍墓地（芦北町）の**計14件**

3　太平洋戦争期の指定等

「花房飛行場給水塔」（陸軍菊池飛行場高架水槽・菊池市指定有形文化財）、**「永山の掩体壕」**（陸軍人吉秘匿飛行場木製有蓋掩体壕・球磨郡あさぎり町登録文化財建造物）の**2件**。また、公有地化されて保護されている事例は以下の二例である。合志市の**黒石原飛行場奉安殿」**は、保存修復事業を進めており、完了後に国登録文化財・市指定文化財となる予定である。また、**東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所変電所**は、荒尾市が所蔵・管理している。

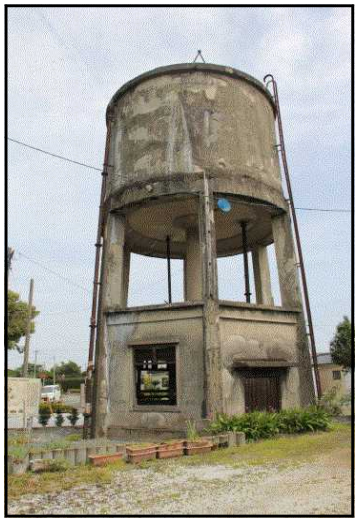


写真1　菊池市指定文化財「花房飛行場給水塔」

4　熊本の「戦争の歴史」をたどる
～熊本に残された戦争の傷跡「七大特徴」～

※高谷和生著『くまもとの戦争遺産　戦後75年平和を祈って』熊日出版　第42回熊日出版文化賞大賞・第34回地方出版文化賞最優秀賞の受賞　※本会HP上に、調査は逐次報告
※『くまもと戦争遺産ガイドマップ』による「熊本県特徴」理解

①軍都熊本市の軍事施設
～熊本城から東部の大江・渡鹿地区への軍施設の移転～

②九州で四番目に多い陸海軍飛行場
～**正規飛行場**、本土決戦に向けての特攻秘匿飛行場の実相～

③東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所
～軍直営で石炭を原料とした黄色火薬等の生産。小型爆弾の生産。製品は小倉造兵廠の弾丸等へ充填、曽根製造所の毒ガス弾の炸薬としても利用

④三菱重工業熊本航空機製作所と学校工場・地下工場
～陸軍四式重爆撃機「飛龍」の生産～

⑤本土決戦に向けての天草地区砲台、震洋等の特攻艇基地と兵站基地としての人吉地区の飛行場・地下工場・地下壕群

⑤－1
□**海峡封鎖の海軍平射海面砲台**　富岡水尻砲台、御領亀島砲台、久玉小松崎砲台
□**戦争末期の特攻艇基地**　富岡元袋震洋基地、牛深茂串震洋基地、上天草地域のマルレ基地
□**三角町、戸馳島、大矢野での陸軍船舶「暁部隊」兵員壕・格納壕**
□**八代海での陸軍特攻艇「マルレ艇基地」柳港、鬼島、佐敷への基地設営**

⑤－2
□**錦町立「人吉海軍航空基地資料館**　2018（平成30年）年8月1日開館
～山の中の海軍の町にしき　ひみつ基地ミュジアム」
□「平和希求文言」未記載等での意見書提示（同年9月）。回答なし。
□沖縄でも問題となる、戦争や戦争遺跡を美化したり、集客目的に利用する**「戦跡の観光地化・商品化」「民間事業者への委託の在り方」「歴史事実の歪曲・矮小化」**ではないか。
□**何でもありの「地域づくり」、文化財活用への危惧**
□県民**「学ぶ旅」観光のあり方、「戦争遺跡の学び（ダークツーリズム）」の本質とは**
□十五年戦争につながった**「満州戰蹟保存運動」**の反省から学ぶ!

⑥県内各地に残る空襲・戦災「被害の歴史」

⑦朝鮮人や中国人、連合国軍「俘虜」労働者、「敵機捕獲搭乗員」への「加害の歴史」

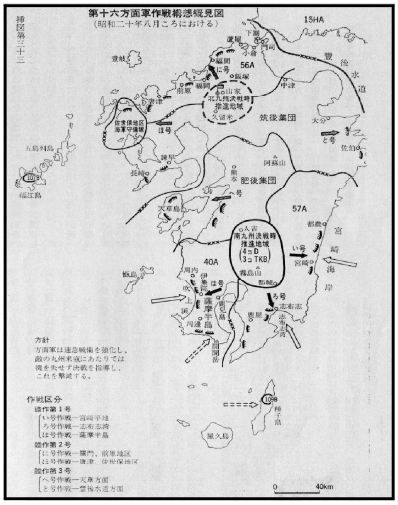
⑦－1　通称「田浦熊本捕虜収容所」。使役企業は「東海電極株式会社田浦工場」で、「福岡俘虜収容所第六派遣所」設置
□捕虜収容所は、三回移転し、最後は工場から南橋を渡り海岸際に位置する。現地には建物基礎・井戸等が現存
□内訳は、102名（米2・英97・NZ3名）、死亡3名
□日本国は、「戦時中の労働力不足」を補うため、約37,000人を、全国130箇所で使役。死者は約3,500人
□**「俘虜待遇条約（ジュネーブ条約）」準用での「違反行為」**
□敗戦時での暴動抑止のため大牟田「福岡俘虜第二十五分所」へ6月30日に移動。使役企業は、電気化学工業株式会社大牟田工場



写真２　田浦捕虜収容所での1944年12月、日本軍によるプロパガンダ「クリスマスイベント」事業
古牧昭三氏提供

Ⅲ　上天草の戦争遺産
1　天草の本土決戦準備

□1945年（昭和20年）になると戦局の悪化にともない、大本営では内地防衛軍の下に軍の改編を急ぎ、2月にはこれまでの西部軍に代わり**第十六方面軍**が編成され、**航空総軍**も創設させた。そして九州では本軍が来るべき本土決戦では作戦区分「決六号作戦」の対応
□この時期、連合国軍においては、沖縄侵攻作戦（アイスバグ作戦）の終焉を見て、首都東京への進行作戦（コロネット作戦）及び**南九州への進行作戦（昭和20年11月1日発動予定のオリンピック作戦）**に向け着々と準備中
□第十六方面軍では、連合国軍上陸の可能性の最も高いのが南九州と特定し、**宮崎平野（い号）、志布志湾（ろ号）、薩摩半島（は号）の各地区防衛を最優先**として、臨時要塞や洞窟陣地、水上特攻基地などが数多く構築されていた。
□熊本県では、**「第十六方面軍作戦構想図」**に示すように、人吉を含めた「南九州決戦時推進地域での決戦準備」のほか、天草を作戦方面とした**「睦作戦第三号（中九州作戦）へ号作戦」**の準備も併行してなされた。
□熊本県では、**「肥後集団」**を結成させ、**熊本師管区部隊、第二一六師団（比叡部隊）、独立混成第一二六旅団（敬忠部隊）**がその傘下におかれた。その内容が防衛研究所戦史



資料２　第十六方面軍作戦構想図　『戦史叢書　本土決戦準備　九州の準備』より

部『熊本師管区戦史資料』「肥後集団作戦計画」に記載

2　天草地区の防衛

□天草に配置されたのは**独立混成第一二六旅団**で、その指揮官**林勇蔵少将の名前から林兵団、天草兵団・有明兵団とも言い「敬忠部隊」**と呼称

□旅団の編成は昭和20年5月23日熊本市の騎兵隊留守部隊で行われ、空襲のなか直ちに移駐した。「天草地区兵団配置図」に示すように下島を中心に歩兵7大隊、砲兵・工兵各1大隊が配置され、指令部は天草市の旧本渡町農業学校におかれた。兵員約7000人、大砲は僅かの2門。各級指揮官の殆ど全部が応召の老将校で、且つ将兵の装備も不十分だった。

□天草の防衛の概要について同書「特攻基地配置図」等で確認できる。**天草海軍航空隊**は次節で述べる。天草地方には**軍管轄の対空警戒所**が富岡に1箇所設けられていたのみで、多くは村単位での民間のものだった。昭和18年になると今津、赤崎、本渡、二江、富岡、下田、大江、牛深等で設置された。**合津の監視所**は、千巌山登山口脇に木造二階建の板壁望楼で、青年学校生徒が四班の監視班を組み12時間交代で勤務していたとの証言が得られている。

□昭和20年2月、本土に連合国軍が上陸してきて内陸戦になった場合を想定し、ゲリラ活動を行うための**特設警備隊**が、熊本県下に17箇所設けられた。そのうち天草地方には、本渡・牛深・富岡・大矢野に設置され、臨時防衛召集の大隊が緊急時には編成予定

□**天草地区には平射砲台として、苓北町富岡の水尻、天草市鬼池の亀島、天草市久玉の小松崎の3箇所**が設けられた。そして各砲台対岸の長崎市野母崎樺島、南島原市加津佐岩戸山、鹿児島県長島町北方崎には、各海峡を封鎖するために対岸砲台を設置

3　天草海軍航空隊基地　～天草地域で「最大の戦争遺跡・遺産」として～

(1) 沿革と概要、最終末での「沖縄への特攻出撃」









写真3　戦闘指揮所前に集合した搭乗員と零式水上偵察機
写真4　本部庁舎前のので本部員記念
写真5　格納庫前の隊員待機　　写真6　天草海軍航空隊搭乗員
有馬正氏所蔵・天草アーカイブズ提供

□天草海軍航空隊は天草市佐伊津に所在する。「佐伊津・御領」飛行場の別称があり、水上機

専用の飛行場である。**旧逓信省天草地方航空機乗員養成所（海軍系）**として、開所準備が完了したところで、全施設を海軍が接収。

□昭和19年3月に**第十二連合航空隊博多海軍航空隊天草分遣隊**として当初は整備教育隊として発足したが、その後は水上機操縦の教育も行った。昭和17年頃より地元中学生や住民の勤労動員、徴用された朝鮮の人々も建設に投入された。

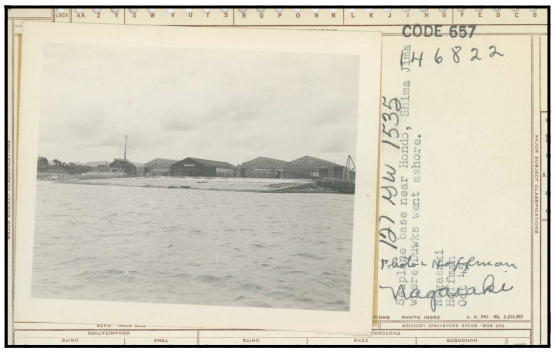
□**昭和20年3月1日、天草海軍航空隊として独立**、第5航空艦隊第12連合航空戦隊に編入。保有機は米軍への引渡目録によれば九三式水上中間練習機36機、九四式水上偵察機3機、九五式水上偵察機15機、零式水上観測機7機、二式水上戦闘機3機の計64機であった。5月5日練習航空隊の指定を解き、第5航空艦隊第12航空戦隊の所属となった。

□昭和20年の沖縄戦においては**第一次攻撃隊が5月24日2機、第二次攻撃隊が6月21日に5機、7月3日に1機の零式水上観測機での特攻作戦を実施し、計8機・16人が特攻死**されている。

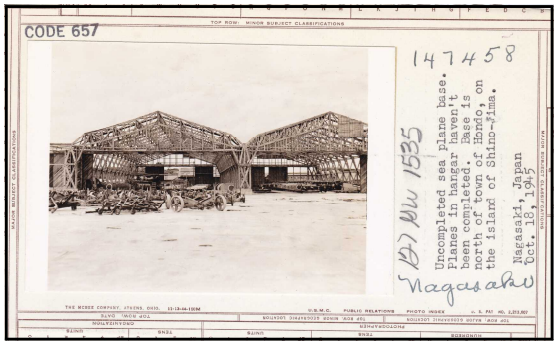
□本部跡の高台には、沖縄作戦で亡くなった隊員の**「特攻慰霊碑」**が、戦後まもなく結成された**「天空会」により、1973（昭和48）年に建立**されている。

(2) 進駐軍が見た「天草海軍航空隊」

□海上から見た天草海軍航空隊の各施設と「スリップ・斜路全景」、格納庫内水上機様子、接収様子等の「全9枚」が残されている。アジ歴「接収目録　天草海軍航空隊」との関連性







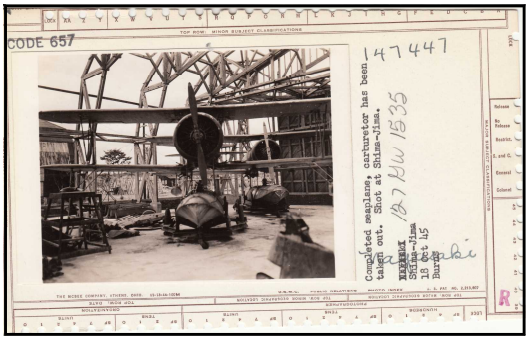


写真7　海上から見た天草海軍航空隊基地　　写真8　納庫内収納の「九五式水上偵察機（アマ－22銘）」
写真９　破壊された格納庫と引渡の機体・翼・部品　　写真10　格納庫内の九五式水上偵察機
長崎平和推進協会提供

(3) 天草海軍航空隊の戦争遺跡・遺構・遺物　～半壊「斜路」をどう保存するのか～

□**「練兵場」跡地**は、その規模を保ちながらそのまま新制中学校である旧佐伊津中学校のグランドとして残存

□堤防海側には水上機の搬出入に利用した**幅60m×奥行30mの「斜路（スリップ）」**が半壊して遺存。

□**北側凝灰岩崖面には、12基の横穴格納壕が現存**しており、それらの一部は内部で連結され、コンクリート打設壕も良好に遺存する。中核を成すのは兵舎の真浦にある空襲時に「指令本部壕」となる入口コンクリート製壕2基及び「発動機壕　1基」である。この壕を中心に、隊員が内部で待避できる待機空間や通路が迷路状に配置されている。

□**「指令本部壕」**の東西位置に配される**「格納壕」**は、平面形がI型・L型・ト型と簡易な形状をなしており、弾薬・燃料・資材等の格納壕である。現在も開口する最大の壕では幅3.6m、高さ2.9m、全長40.0mを測る。

□旧金浜城跡に立地する指令本部の真下には海側からの入口2箇所、練兵場からの入口3箇所の待避壕が設けられる。現在は壕途中で閉塞されるが、医務所用途の壕との証言

□**「発動機壕・発動機室」**は、全域コンクリート敷設で、入口通路部と発動機室で構成。入口はコンクリート厚40cmで強固に敷設され、上部に土砂が盛られている。通路部は全長5.8m、横幅2.4m、高さ2.5mで、断面形状は蒲鉾型、向かって左側に計20cmの鉄管が埋め込まれている。

□**「発動機室」**は、全長11.45m、横幅4.0m、高さ3.9mを測り、中央部には発動機の設置場所と

して42cm嵩上げし、機械設置のボルト8本が残存している。また、その中央部には横62cm、縦51cm、深さ35cmの小型方形水槽がある。また、排水路も土台右端、下面に流下するが埋土のため全長を確認できていない。

□隣接する壁面には、方形で上下に延びる換気筒様の施設。通路から延びる鉄管下にもボルト4本が残存するコンクリート製土台も設置。両者ともに排気施設と想定される。天井には鉄輪が3本、L型金具が1本現存する。右奥部及び奥壁左部には、通路への入口が設置。

□**「移築兵舎」**は、敗戦後に不要となった軍施設建物は、種々の再利用が図られ、戦災による資材難の時代日本復興の大きな力となった。天草航空隊基地兵舎等は昭和21年2月火災で焼失した**「本渡町役場」に航空隊建物の移築**

□新設された旧本町中学校への兵舎移転。平成22年「**旧本町中学校**」の閉校に伴い、廃校施設利用のプレジェクト活動の一環として熊本県立大学辻原万規彦研究室で移築校舎の測量調査等がなされ貴重な所見を得た。新たに発見された棟板によれば、施工は千原組（千原万五郎）で、この玄関を含む校舎建物は、兵舎建物規格に合致するものはなく、材に切り欠きが各所に見られることから一旦解体された倉庫2棟の建築材を転用した可能性が高いことが判明









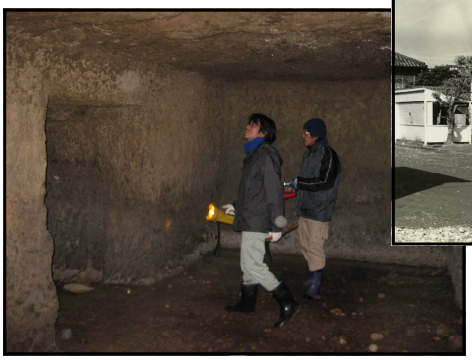


写真11　水上機滑走台「斜路」側面部　　写真12　RC造の地下発電壕入口
写真13　地下発電壕の内部空間　　写真14　兵員壕内部の連結状況
写真15　戦後移築された「本渡町役場」の様子　　天草アーカイブズ提供

4　三角・大矢野の陸軍船舶「暁部隊」





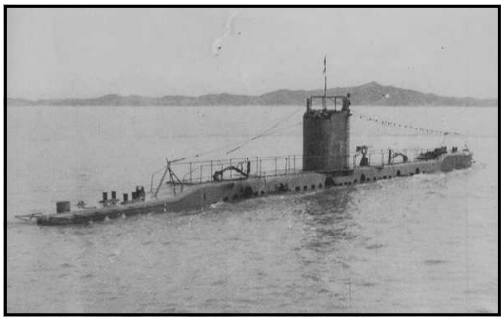


写真16　裏面に部隊銘を記された「下石歯科医院」看板　　写真17　本部舎と「暁第四二三六五部隊本部」看板　　写真18　陸軍潜水艦「マルユ艇」著作権フリー素材

(1) 三角の暁（あかつき）部隊

□**陸軍船舶部隊「暁部隊」**。本部隊は、陸軍が国外で軍事作戦を行う上で必要とする兵員、兵器、弾薬、食糧など必要な軍需物資等を海上輸送する部隊である。
□昭和19年10月から海上輸送や軍需物資の管理等をつかさどる**「第十五船舶団」**司令部が、
□本隊は、陸軍予備役の林少佐指揮下の船舶部隊である。
□遠洋漁業用100㌧位の徴用漁船が中心で、物資運搬ダンベ船も配置。三角町周辺には陸軍関係の多くの物資が集積。第十五船舶団では、**天草配備の「独立混成二百十六旅団」**への物資補給も担当する。
□長崎県南島原市口之津港に派遣された陸軍マルユ艇部隊である**「第二潜航輸送隊」**による南西諸島への物資補給を実施し、**「マルユ　十二号艇」**への三角港での米軍機からの銃撃記録も残される。
□地元の「下石歯科医院」看板の裏面には、**「暁第四二三六五部隊本部」銘**が墨書され残されている。現在は熊本市中央区京町**「下石歯科醫院京町診療所」**に、看板は移設

(2) 戸馳島野崎（のざき）の弾薬格納壕

□本壕は、三角港を対岸とする野崎の「旧製氷工場」裏手となる。
□**陸軍弾薬壕**の入口は2箇所で、その間隔は25.1m。1号入口前には**爆風除けのコンクリート塀**（高170cm、横残存200cm、厚30cm）が建った状態で現存し、2号入口前にも同様のコンクリート爆風除け障壁が前面に倒れ込む。さらにコンクリート塀前には、切石で二段の石垣を組み丁寧に入口、コンクリート製床通路部（全長250cm×横120cm×22cm厚）を造作
□内部平面は「井桁」状で、二本の**「縦坑（最大で横幅2.2m、高さ2.6m）」**に対し、直行する横方向に四本の「格納部」及び二本の縦坑を連結する「通路部」が連結しており、奥行30.6m
□**格納部は断面蒲鉾形で「全長5.5～6.7m、横幅2.3m、高さ2.8m」、通路部は同形で「横2.2m、高さ2.0m」**の規模である。本壕には証言では「弾薬はまだ格納されず」敗戦をむかえた。





写真19　格納壕1号入口前に設置された爆風よけコンクリート塀　　写真20　弾薬格納壕内部
写真21　内部からの2号入口

(3) 三角町涼松（すずみまつ）の兵員壕、前越（まえごし）の格納壕

□**三角町涼松丘陵東側**に4箇所、西側に3箇所の入口が現在も開口する**兵員壕**
□**陸軍が地元の青年学校・国民学校高等科の生徒等も徴用しながら掘削**したもので、内部は蒲鉾形の素ぼりで横幅3.0m、高さ2.8mを測る。これらの壕内部は、迷路状に通路及び兵員待機室が配されており、先端は崩落しており全長約25mを測る。
□**新地前越地区**にも爆風除け「L型土塁」を有する**「格納壕3基」**が、良好な状態で現存するが、入口部崩落のため内部への入室は行っていない。





写真22　涼松の兵員壕内部で最大部　　写真23　兵員壕の入口と屈曲部
写真24　新地前越地区の格納壕前の「Ｌ型土塁」状況

(4) 大矢野町の燃料格納壕

□昭和20年春先から、大矢野町登立地区の東満・双原・辺田・尾上・積米・尾越崎の各地区に**ドラム缶入り燃料等の格納壕**を掘削

□東満には壕1基が擁壁工事後に現存し、断面矩形の入口（横2.9m、高さ2.3m）、内部は蒲鉾型（横2.1m高さ1.9m）で、木扉取付の痕跡が残される。格納されていたのは、対岸の八代市昭和農産加工所（現メルシャン）で生産されたメチル・エチルアルコール等の燃料





写真25　大矢野島東満の補給品壕内部の様子
写真26　入口の扉材設置の岩盤切り込み

5　上天草の陸軍特攻挺身隊「マルレ」艇基地

(1) 陸軍海上挺進隊

□昭和20年に入ると、陸軍では来るべき本土決戦に備え通算3回にわたり兵員を増強した。第一次は2月、第二次は4月で、歩兵師団や砲兵が中心であったが、第三次備計画（5月31日）では、海上挺進戦隊十コ戦隊が動員された。たまたま第三次計画より六日後、**陸軍の飛行練習生である特別幹部候補生（特幹）**の第三期修了式があり、この兵力を持って**「海上挺進第三十一～四十戦隊」の編成**がなされた。この特攻艇搭乗員598名は江田島・幸の浦の第十教育隊で訓練したあと、実際の配置についたのは7月に入ってからであった。

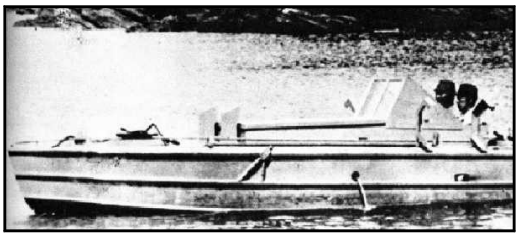
□特攻艇の暁部隊は、**陸軍が広島宇品で編成した海上挺身戦隊**で、船舶兵約100名、特攻マルレ艇100隻を基準として編成し、約600名で部隊運用がされていた。海上挺身三十一～四十戦隊には、これまで展開した諸戦隊と同様に、大尉または中尉を長とする附属部隊としての作業・整備の海上整備隊約400名が配備され、上陸用舟艇大発・トラックなどを常備していた。

□**海上挺進第三十一～三十八戦隊の八コは第十六方面軍（横山中将）**のもと、昭和20年6月に配備が決まり、熊本師団には有明海を対象地区とする第三十七戦隊が配備され肥後集団に属した。熊本県を主管する肥後集団では、昭和20年本土決戦に向けて、熊本本土には広く遊撃する第二一六師団を、天草には独立混成第一二六旅団を編成した。併せて有明海の海上防御として、急造された陸軍海上船舶部隊の海上挺身第三十七戦隊と第七海上挺身整備隊を昭和20年4月以降に配置した。

(2) 陸軍四式連絡艇「マルレ艇」

□マルレ艇とは、**非匿名を連絡艇**と称し、全長5.6m、幅1.8m、最大速度20～24ノット、250kg爆薬装備のベニヤ製挺身艇である。

□**海軍が開発した震洋艇とほぼ同規格**で、爆薬は直前で投棄して廻船するものだが、結果的には震洋艇と同様に特攻用として使用された。



(3) 柳マルレ艇基地

□陸軍のマルレ艇の配置は海軍と異なり、重要地域に重点配備するもので三十七戦隊の司令部及び主力部隊は天草上島の柳港周辺にあった。本地区の作戦名は睦（むつみ）三号作成と称しており、第**三十七戦隊は別称「暁第一九八五二部隊・戦隊長は梅田常男大尉」**である。第七海上挺身整備隊は基地防備隊と想定されるが、詳細は不明

□昭和20年4月に来島し、部隊幹部は**合津港の旅館七福屋**を宿舎とし、**一部の幹部は柳港の霊光寺、兵員は中南国民学校等**に常駐した。これら移駐してきた設営隊に、**前島・中島・鬼島**には盛んに海際にマルレ艇格納壕が掘られていたことが『松島町史』及び証言等にも記されている。早朝に合津港より大発に移乗し夕方作業を終え帰港した姿も目撃されている。

□**瀬島**には、阿村港を正面とした岩盤に5本の格納壕を掘削され、全長約10m、横幅約約2.0m、高さ約2.0mの3本の壕が完成していた。**鬼島**には尾越崎の桟橋に面する島中央部に石積波止場として格納壕1基が完成していた。中島については所在は不明である。



写真27　陸軍特攻艇「マルレ」著作権フリー素材　　写真28　鬼島マルレ艇波止場

Ⅳ　上天草市龍ヶ岳町「樋島への空襲」

(1) 熊本県への空襲と天草地域の位置づけ

□太平洋戦争期、米軍の九州への空襲実相については**『日本の空襲8　九州』（三省堂）**が刊行されており、そこには熊本をはじめ九州各地の空襲概要を示しながら、あわせて戦争世代からは多くの空襲体験・証言が寄せられている。本書の出版は1980年であり、この時期は、空襲研究史的には**マリアナのB29部隊作戦任務報告書の和訳**が徐々に進み、大都市のみならず中小の各都市・地方への空襲状況が判明しつつある時期であった。ただ、**海軍の機動艦隊による艦載機空襲の資料収集や調査**はまだ途につかず、沖縄から出撃して本土決戦・上陸作戦を前哨し**九州地方を攻撃した極東航空軍**への認識はまだなされていなかった。

□全国空襲戦災を記録する会及び米軍資料検討会等での最新の調査によれば、九州地方及び熊本への空襲は、以下の4項目に示すことができる。

ア「成都基地からのB29部隊による空襲」
イ「南方諸島マリアナ基地からのB29部隊による空襲」
ウ「海軍機動艦隊の空母艦載機による空襲」
エ「沖縄に移駐した陸軍極東航空軍による空襲」

(2) 米海軍艦載機による日本空襲

□**日本本土への初空襲は1942年（昭和17年）4月18日の「ドゥリトル空襲」**である。これは陸軍中型爆撃機B-25の16機を空母で日本の東方洋上まで運び、そこから日本本土を空襲した陸軍と海軍の共同作戦であった。名称は爆撃機隊の指揮官であったジミー・ドーリットル中佐に由来

□海軍の第16・第18任務部隊は、B-25を搭載する空母ホーネットと、これを護衛する空母エンタープライズから成っており、空母を中心として巡洋艦2隻、駆逐艦4隻、補給艦1隻で構成されていた。空母ホーネットの艦長で司令官はマーク・ミッチャー、空母エンタープライズに座乗していたウイリアム・ハルゼーは、陸海軍共同作戦の総司令官だった。この攻撃は陸軍機であったが、それ以降海軍の艦載機が再び東京を空襲するのは1945年2月になってからである。

□太平洋戦域での米軍侵攻作戦の概要が決まったのは、1944年9月29日から10月3日にサンフランシスコでの陸海軍統合会議だった。幾つかの変容を受け米海軍は次の大きな3つの各作戦期で、日本本土空襲を行った。

①2月16日～3月4日　　硫黄島上陸作戦支援
②3月18日～5月28日　沖縄作戦支援
③7月10日～8月15日　日本本土上陸に備えた空襲と艦砲射撃

これらの作戦攻撃では、**①と②は第5艦隊第58任務部隊、③は第3艦隊第38任務部隊**によるものであるが、名称を変更しただけで、本質同部隊であった。

(3) 樋島波止場空襲の証言

□**昭和20年3月29日の樋島への空襲**については、幾つかの証言が残されており、その中で戸山銀三さんの証言を引用する。

□「終戦の年、昭和20年3月29日、この日は**私の町樋島に大空襲があった日**です。大人一人、小学校の児童六人が亡くなりました。その日は数日前から出征兵士見送りと決まっていました。若い軍隊経験者や、現役入隊の方々はすでに出征され、もうこの島には召集兵はいないのではないかと思っていましたが、更に召集がきました。40歳前後と思われる方々で、子供もあり家庭もあり、それも十数名、いよいよ最後の兵士見送りかと、ほとんどの人が重苦しい思いを感じていたと思われました。当日は朝から村中の人が、旅客船が着ける波止場に見送りに行きました。海岸沿いの道路には、早くから小学校の子供達も多数来ていました。みんな日の丸の小旗を持って、お別れの言葉を交わしたり、家族の方々に激励をしたり、波止場はごったがえしていました。その時海を隔てた向こうの龍ヶ岳の上空を二十機あまりの小型飛行機が、北の空に向かって飛んで行くのが見えました。私達は日本の飛行機と思い“頑張って”と声を出しながらみんなで日の丸の旗を振りました。やがて海の向こうから旅客船が見えて、波止場に接岸しました。愈々お別れの時といっせいに万歳、万歳と叫びながら、ざわざわと動き出しました。と、その時、バラバラと機銃掃射の音と供に、周辺の海や船舶を目掛けて数発の爆弾を落としました。船は微塵に砕けて飛び散り龍のような水柱が何本も揚がるのが見えました。爆音・爆風・落雷か地鳴りか、目を射るような光線と共に凄まじい金属の音、機銃掃射の音、一瞬の出来事で集まった人々は海に、山に必死に逃げました。爆音と機銃掃射の続くなか、瞬時竹藪の陰から日の丸のない真っ黒な機体が見えました。一瞬の空襲で、家や船や港も道路も見る影もなく破壊され、大型船のアンカーやマスト・ブリッジ等の破片が、遠く離れたお寺の境内や家屋の中まで落ちていました。恐怖の中に人々は唯呆然と立ち尽むばかり、犠牲になった大人の人は船の上で亡くなり、小学校の子供達は海岸道路を逃げて、物陰に身を隠すことが出来なかったのだろうか、六名亡くなりました。**私は変わり果てた港をみて“こんな小さな島まで空襲されるなんて”と、祖国の将来を思い、この戦争の悲しさを初めてかみしめました」**

□この空襲により**当時国民学校4年から6年生であった「平岡安雄、森本克伸、山道一則、小川博明、岩本好司」の児童5名と新波止沖の船上で石橋和明（船員）が物故**した。湾内船舶への被害では大型貨物船4隻（江口金栄、梶原浅松、高木了他1名所有）、半壊11隻、被害40隻とされ、他にも漁船70隻が銃撃等を受け被害を受けた。さらに波止場に面した家屋20棟が全壊し、周辺の300軒にも被害が及んだ。島全域での被害の状態から**樋島大空襲**と呼んでいる。

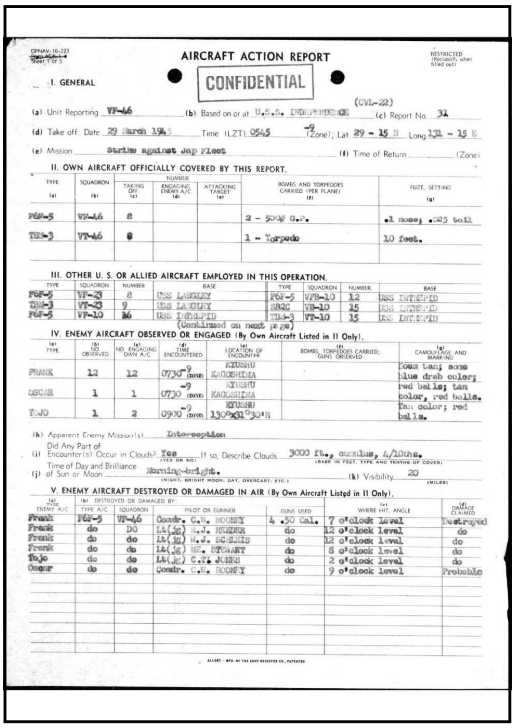
□また、出征兵士は、当時40歳の同級生ばかり「段下金吾、溝川清秀、片岡千代喜、小道清

利、米田精市」の5名である。空襲後出征兵士達は、自宅で防空壕を掘ったりしたあと、夕方全員揃って警防団からの貸切船で対岸の芦北町田浦に渡り応召した。

(5) 米空母「インディペンデンス」のアクションレポート

□艦載機による日本本土への空襲について、日時や場所がわかっている際に、その詳しい内容を知るために、艦載機の**戦闘報告書（Action Report）**が活用できる。戦闘報告書には実施部隊での幾つかの階層がある。それは艦隊（ここでは第5艦隊の作戦計画をまとめた艦隊報告）から任務部隊（ここでは該当する第58任務部隊の該当日時の報告）、各任務群（ここでは第58.4任務群の該当日時の報告）、各空母（所属空母艦名CV及びCVL）、さらには空母に配備された艦載機の機種別による戦隊（VFの戦闘飛行隊・VTの電撃飛行隊隊）や飛行群の戦闘報告へと繋がっていく。

□今回の樋島空襲では、九州西岸域・八代海という該当地区が**第58.4任務群配当地区**であり、該当のヨークタウン、イントレピット、ラングレー、インディペンデンス計4隻の各空母戦闘記録から当該日、八代海域での具体的地名が現れる攻撃記録から艦艇と攻撃部隊を特定した。その結果、**軽空母インディペンデンス艦載機による攻撃**であることが判明した。



AIRCRAFT ACTION REPORT

CONFIDENTIAL

(CVL-22)

I. GENERAL

(a) Unit Reporting VF-46 (b) Based on or at U.S.S. INDEPENDENCE (c) Report No. 31

(d) Take off Date 29 March 1945 Time (LZT) 0545 +9 (Zone); Lat 29 - 15 N Long 131 - 15 E

(e) Mission Strike against Jap Fleet (f) Time of Return (Zone)

II. OWN AIRCRAFT OFFICIALLY COVERED BY THIS REPORT.

TYPE	SQUADRON	NUMBER TAKING OFF	NUMBER ENGAGING ENEMY A/C	NUMBER ATTACKING TARGET	BOMBS AND TORPEDOES CARRIED (PER PLANE)	FUZE SETTING
F6F-5	VF-46	8			2 - 500# G.P.	.1 nose .025 tail
TBM-3	VF-46	8			1 - Torpedo	10 feet.

III. OTHER U. S. OR ALLIED AIRCRAFT EMPLOYED IN THIS OPERATION.

TYPE	SQUADRON	NUMBER	BASE	TYPE	SQUADRON	NUMBER	BASE
F6F-5	VF-28	8	USS LANGLEY	F6F-5	VF9-10	12	USS INTREPID
TBM-3	VT-28	9	USS LANGLEY	SB2C	VB-10	15	USS [illegible]
F6F-5	VF-10	16	USS INTREPID	TBM-3	VT-10	15	USS INTREPID

(Continued on next page)

IV. ENEMY AIRCRAFT OBSERVED OR ENGAGED (By Own Aircraft Listed in II Only).

TYPE	NO. OBSERVED	NO. ENGAGING OWN A/C	TIME ENCOUNTERED	LOCATION OF ENCOUNTER	BOMBS, TORPEDOES CARRIED; GUNS OBSERVED	CAMOUFLAGE AND MARKING
FRANK	12	12	0730 -9 zone	KANOSHIMA KYUSHU		Dawn tan; some blue drab color; red balls; tan color, red balls.
OSCAR	1	1	0730 -9 zone	KAGOSHIMA KYUSHU		
TOJO	1	2	0900 -9 zone	KAGOSHIMA KYUSHU		Tan color; red balls.

(b) Apparent Enemy Mission(s) Interception

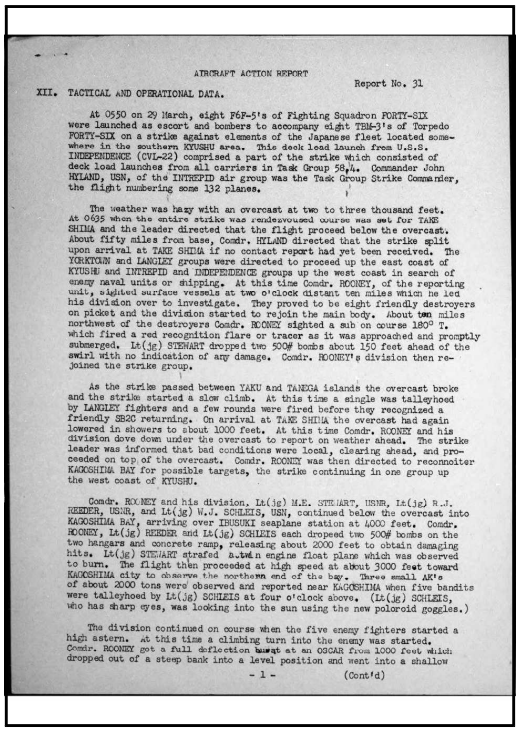
(i) Did Any Part of Encounter(s) Occur in Clouds Yes (YES OR NO) If so, Describe Clouds 3000 ft., cumulus, 4/10ths. (BASE IN FEET, TYPE AND TENTHS OF COVER)

(j) Time of Day and Brilliance of Sun or Moon Morning-bright. (k) Visibility 20 (MILES)

(NIGHT, BRIGHT MOON, DAY, OVERCAST, ETC.)

V. ENEMY AIRCRAFT DESTROYED OR DAMAGED IN AIR (By Own Aircraft Listed in II Only).

(a) ENEMY A/C	(b) DESTROYED OR DAMAGED	TYPE A/C	SQUADRON	PILOT OR GUNNER	GUNS USED	(c) WHERE HIT, ANGLE	DAMAGE CLAIMED
Frank	F6F-5	VF-46	Comdr. C.W. ROONEY	4 .50 Cal.	7 o'clock level	Destroyed
Frank	do	do	Lt.(jg) W.J. SCHLEIS	do	12 o'clock level	do
Frank	do	do	Lt.(jg) W.J. SCHLEIS	do	12 o'clock level	do
Frank	do	do	Lt.(jg) M. STEWART	do	8 o'clock level	do
Tojo	do	do	Lt.(jg) C.E. REEDER	do	2 o'clock level	do
Oscar	do	do	Comdr. C.W. ROONEY	do	9 o'clock level	Probable



AIRCRAFT ACTION REPORT Report No. 31

XII. TACTICAL AND OPERATIONAL DATA.

At 0550 on 29 March, eight F6F-5's of Fighting Squadron FORTY-SIX were launched as escort and bombers to accompany eight TBM-3's of Torpedo FORTY-SIX on a strike against elements of the Japanese fleet located somewhere in the southern KYUSHU area. This deck load launch from U.S.S. INDEPENDENCE (CVL-22) comprised a part of the strike which consisted of deck load launches from all carriers in Task Group 58.4. Commander John HYLAND, USN, of the INTREPID air group was the Task Group Strike Commander, the flight numbering some 132 planes.

The weather was hazy with an overcast at two to three thousand feet. At 0635 when the entire strike was rendezvoused course was set for TANE SHIMA and the leader directed that the flight proceed below the overcast. About fifty miles from base, Comdr. HYLAND directed that the strike split upon arrival at TANE SHIMA if no contact report had yet been received. The YORKTOWN and LANGLEY groups were directed to proceed up the east coast of KYUSHU and INTREPID and INDEPENDENCE groups up the west coast in search of enemy naval units or shipping. At this time Comdr. ROONEY, of the reporting unit, sighted surface vessels at two o'clock distant ten miles which he led his division over to investigate. They proved to be eight friendly destroyers on picket and the division started to rejoin the main body. About ten miles northwest of the destroyers Comdr. ROONEY sighted a sub on course 180° T. which fired a red recognition flare or tracer as it was approached and promptly submerged. Lt(jg) STEWART dropped two 500# bombs about 150 feet ahead of the swirl with no indication of any damage. Comdr. ROONEY's division then rejoined the strike group.

As the strike passed between YAKU and TANEGA islands the overcast broke and the strike started a slow climb. At this time a single was talleyhoed by LANGLEY fighters and a few rounds were fired before they recognized a friendly SB2C returning. On arrival at TANE SHIMA the overcast had again lowered in showers to about 1000 feet. At this time Comdr. ROONEY and his division dove down under the overcast to report on weather ahead. The strike leader was informed that bad conditions were local, clearing ahead, and proceeded on top of the overcast. Comdr. ROONEY was then directed to reconnoiter KAGOSHIMA BAY for possible targets, the strike continuing in one group up the west coast of KYUSHU.

Comdr. ROONEY and his division, Lt(jg) M.E. STEWART, USNR, Lt(jg) R.J. REEDER, USNR, and Lt(jg) W.J. SCHLEIS, USN, continued below the overcast into KAGOSHIMA BAY, arriving over IBUSUKI seaplane station at 4000 feet. Comdr. ROONEY, Lt(jg) REEDER and Lt(jg) SCHLEIS each dropped two 500# bombs on the two hangars and concrete ramp, releasing about 2000 feet to obtain damaging hits. Lt(jg) STEWART strafed a twin engine float plane which was observed to burn. The flight then proceeded at high speed at about 3000 feet toward KAGOSHIMA city to observe the northern end of the bay. Three small AK's of about 2000 tons were observed and reported near KAGOSHIMA when five bandits were talleyhoed by Lt(jg) SCHLEIS at four o'clock above. (Lt(jg) SCHLEIS, who has sharp eyes, was looking into the sun using the new poloroid goggles.)

The division continued on course when the five enemy fighters started a high astern. At this time a climbing turn into the enemy was started. Comdr. ROONEY got a full deflection burst at an OSCAR from 1000 feet which dropped out of a steep bank into a level position and went into a shallow

- 1 - (Cont'd)

資料３・４　インディペンデンス・アクションレポート　※部分該当頁のみ

(6) 米空母「インディペンデンス」

□該当艦インディペンデンスについて詳述する。1941年12月の真珠湾攻撃後の危機でアメリカ海軍には多くの航空母艦を配備する必要が生じた。海軍は正規空母のエセックス級の建造を加速すると同時に、1942年1月にはクリーブランド級軽巡洋艦1隻を航空母艦に改装するよう命じた。同級の設計は小さなアイランドと共に、比較的短く狭い飛行甲板および格納庫を特色とした。1943年の1月から12月までに改装は完了し、**エセックス級8隻とインディペンデンス級9隻は1943年11月から1945年8月までの太平洋における攻撃部隊の主力**となった。インディペンデンス級の軽空母は、9隻巡洋艦時代の軽敏な速力と排水量を備えており、主力空母群と行動をともにすることができた。

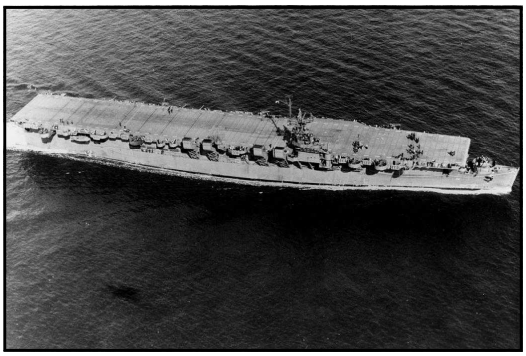


写真29　航空母艦インディペンデンス

□**インディペンデンス（USS Independence, CV/CVL-22）**は、アメリカ海軍の航空母艦でインディペンデンス級航空母艦のネームシップ。**本艦はその前身の軽巡洋艦アムステルダムとして起工**され、1942年8月22日にはニュージャージー州カムデンのニューヨーク造船所でCV-22として進水。艦種が軽空母（CVL）に変更されたあと、本艦のハルナンバーはCVL-22に変更。ラバウルおよびギルバートへの攻撃、フィリピン戦線に参戦し、1945年3月13日、修理を終えたインディペンデンスはウルシー環礁に戻り、翌日には沖縄に向けて出撃する。樋島空襲後の3月30日、31日には侵攻前空爆を行い、沖縄戦第一日目の4月1日の攻撃では補給施設と航空機を破壊した。6月

10日まで沖縄水域に留まり、その後レイテ島に帰投し7月1日、第38.4任務群に加わり、日本本土に対する最終攻撃に参加した。戦後はマジック・カーペット作戦に参加し、11月15日から復員兵輸送に従事する。1946年1月28日にサンフランシスコに到着、その後ビキニ環礁での原爆実験（クロスロード作戦）の目標艦に指定され沈没した。

(7) バッドガー大尉「F6F」機等による攻撃

□インディペンデンスには当初は艦上戦闘機、艦上爆撃機、艦上雷撃機各9機の編成で搭載していたが、樋島空襲時期では**戦闘機約24機、雷撃機9機の配備**となっていた。艦載機の戦闘報告書からその一部を紹介する。



写真30　空母艦載機F6Fヘルキャット

□4ページ目の下の部分

バッドガー大尉の小隊は0810-0820時（訳者註-日本時間）に北緯32度20分、東経130度15分の**八代湾内の御所浦島にある波止場と船舶群へ7発の爆弾を投下**した。1隻のFTD船が海岸から100ヤードの所に停泊していた。60-75隻の漁船が波止場に沿って停泊していた。そのうち、**15-20隻の漁船を撃沈**した。

□8ページ目の中段の部分

その間に、西海岸に沿って艦船の捜索をしていたが、成果が上がらないとわかった。ハイランド中佐はその後、笠ノ原飛行場と串良飛行場の攻撃を命令し、雷撃機は臨機目標へ魚雷を使用するように指示した。バッドガー大尉と彼の小隊はイントレピッド隊の2機の戦闘機と共に20機の雷撃機の護衛に留まっていた。**その6機の戦闘機は即座に御所浦島の本郷にあった波止場と小型船舶へ爆弾を投下した。爆撃と機銃掃射によって、約20隻の小型船舶に激しい損傷を与えるか撃沈し、無数の火災を発生させた。**

□ここで報告にある**コードネーム「FTD」船**について米軍側の分類等をまとめる。米軍は、写真偵察任務だけでなく戦闘任務中でも湾港に碇泊している船舶や攻撃した船舶の観察を求めた。戦争末期においては、日本の民間船舶を用途と大きさ、主に排水量によって分類していて、戦闘後の報告もこの分類によった。それは甲板上の上部構造とエンジン位置により4種類（Tare・Fox－Tare・Fox・Sugar）に分類し、さらに排気量などにより細分化した。FTは「Fox－Tare」、Dは「Dog」とし、1,000-1,500総トンの三島型貨客船を指す。なお、当日の日本側記録では、**この船舶は「姫戸丸」**

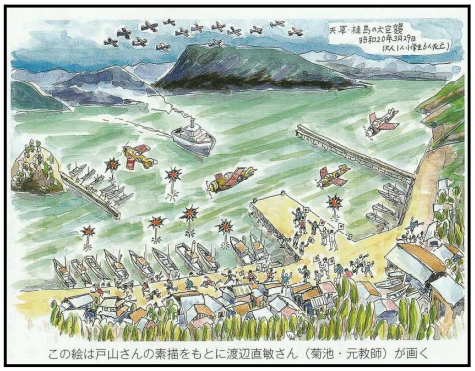


写真31　樋島波止場への米艦載機攻撃の証言による復元図

(8) 樋島波止場を御所浦本郷港と誤認

□この日、第58.4任務群から日本艦隊への索敵攻撃に出撃した全部隊の戦闘報告書のなかで3月29日該当する資料は限られる。特に八代海該当は本資料のみであり、島嶼地域で、港や周辺の山々が類似するなか、**樋島波止場への攻撃を、北上する途中にあった御所浦島・本郷港と見誤り**、帰隊後に本報告書を作成したことと想定でき誤記と判断できる。

□御所浦島への3月29日空襲記録の記載等は見られない。

Ⅴ　天草地区の個人慰霊「軍人像」と慰霊の姿　※『くまもとの軍人像』を参照

(1) 軍人像とは

□**軍人像とは、明治以降の近代戦争で亡くなれた軍人を慰霊・顕彰**する目的で製作・設置された像である。

□戦争遺跡研究会清水啓介氏の設置形態を基にした分類では**「個人慰霊軍人像・個人顕彰軍人像・集合軍人群像」の3分類**がなされている。また、軍人像材質は「屋外建立では銅製・コンクリート製・石製で、屋内安置は木製」であり、個人慰霊軍人像は「父・母・兄等遺族による建立が全てで、設置場所は墓地や個人敷地内が多い」、個人顕彰軍人像は「建設会や顕彰会等団体による建立が多く、神社や寺院境内が多い」ことが確認されている。

□古来より**「武運長久を祈る神」が、近代で「武勲を立て勇敢に戦死した軍人が神格化」した「軍神像」**とは区別する。先の清水啓介氏の愛知県中心とした2016年段階での調査・分類では「個人慰霊軍人像34体、個人顕彰軍人像56体、集合軍人群像12群」が確認される。

(2) 天草地区の個人慰霊「軍人像」

□天草地方に分布する個人慰霊像をまとめる。天草市栖本町に①福江喜八像、ア福原為義像、イ玉田和雄像、ウ前田貞義像、エ林邊又市像　の計5躯体、同市河浦町にオ本多常敏像、同

市御領町にカ宮崎義髙像、同市本渡町にキ原田利光像、同市枦宇土町にク岩永浩太像が所在する。

□上天草市龍ヶ岳町大道にケ太田家像、同市松島町阿村にコ藤本敏雄像、同市大矢野町中柳に②山本久七像、同市松島町合津に③嶋﨑憲次像、同市倉岳町浦にサ岳本亭造像の天草島内「**計14躯体**」が確認される。

(3) 上天草市大矢野町「山本久七軍人像」　番号②

本形式は「栖本型・Ⅱ類」に分類

□所在地　上天草市大矢野町中柳9877
□像名　　故陸軍歩兵上等兵　山本久七之墓
□没年月日・没年齢　不明
□石材　　凝灰岩製か　全身に黒色コールタール状液を厚く塗布
□装備：陸軍軍衣、三八式歩兵銃、前ごう、後ごう、背のう、飯盒、雑嚢、剣差　他
□尊像　全高160cm　全幅50cm　□台座　全高38cm、台座幅56cm
□戒名：不明　　□石工名：記載なし
□銘文：故陸軍歩兵上等兵　山本久七之墓　昭和十五年八月
　　建立者　山本九八
□備考：墓所整理時に他所より移築か、親族が管理



写真32　山本久七軍人像

(4) 軍人丸大明神さん　　上天草市松島町合津6100－17

□像名：**軍人大明神「嶋崎憲治」像**
□石材：**頁岩製**。25年程前に全身灰色・縁部赤色に塗彩。現在は、慰霊用の屋外の祠内に安置され、蝋燭すすで黒色に変じる。
□陸軍軍衣。当初は左手に軍刀を保持か。
□全高：30cm、全幅：12cm
□銘文：不明。家族証言では、中支派遣栄第一六四五部隊第三中隊所属、昭和一九年八月七日戦死。出征時に武運長久を願い、建立
□建立者：嶋崎憲治郎
□石工：姫戸町矢岳の某石工

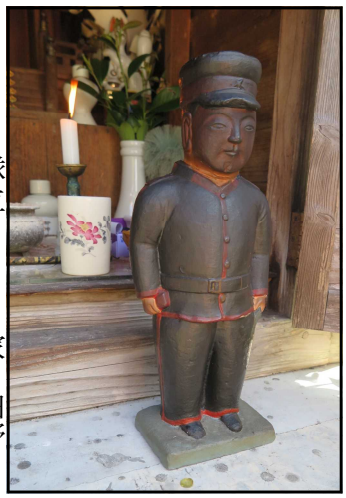


写真33　軍人丸大明神像

(5) 熊本県内事例と下浦石工

□**熊本県内個人慰霊軍人像事例**では、天草市栖本町に5体（山崎家・福原家・玉田家・前田家・林邊家）、同市河浦町に1体（本多家）、上天草市龍ヶ岳町大道に1体（太田家）、天草市本渡町に1体（原田家）、天草市枦宇土町に1体（岩永家）、上天草市松島町・大矢野町（藤本家・山本家・嶋﨑家）の3体、天草氏倉岳町（岳本家）の「**計13体**」が確認されている。
□人吉市城本町（内山家）に1体、八代市泉村久連子（中村家・川野家・上田家・仲川家）に4体、八代市郡築町（嶋﨑家・但しコンクリート製、損壊2体）3体の「計6体」、芦北町には戦後建立であるが石像2体の軍人像所在情報が確認できる。**県内では「計24体」が遺存**する。今後、熊本県内の分布調査と各軍人像詳細調査が必要。併せて、屋外設置では「八代地域のコンクリート製軍人像の緒言」、「屋内設置像」の把握と関係性がある
□熊本県内には、通潤橋を造作した種山石工をはじめ、多様な　石工集団が所在する。ここ天草では下浦町に、「加工しやすい　砂岩と良港に恵まれた」ことから、およそ300年の歴史を有する「**下浦石工」の集団**がある。19世紀以降は、下浦産砂岩の需要が急速に高まり、建築資材として社寺の参道敷石の提供が行われ、それは本渡「祇園橋」で結実する。本軍人像の幾つかは、「下浦石工集団」による造作による物である。
□**戦死・戦没者への慰霊の姿、天草地域の祖先・先祖崇拝への意識の高さ、濃厚さ等**が墓地の立派さとして表出され、「**天草地域での屋外に設置された石製軍人像の集中**」と想定する。

(6) 県内各地の軍人像達

□ここでは天草地域を除く県内各地に点在する特徴的な軍人像を紹介する。人吉市城本町にシ内山七郎像、八代市泉村久連子に④中村源三像、ス川野菊巳像、セ上田音次郎像、ソ仲川武一像の計4躯が確認できる。
□さらに材質は異なるが、コンクリート製軍人像が八代市郡築町の⑤嶋﨑正雄像、同市井揚町のタ岩崎家像、同市千丁町にチ石川吉登像の三躯が所在する。また、戦後建立ではあるが、芦北町上井牟田に⑥上村勲像・ツ上村清雄像の2躯が確認できた。天草島外では「**計10躯体**」が確認される。



表1　天草地区軍人像位置図
　　天草市文化課松本博幸氏及びくまもと戦跡ネッ　ト高谷和生作成

(7) 軍人像と県内の石工

□熊本県内個人慰霊軍人像事例では、**県内で「計24躯体」**が確認できている。
□最古は昭和7年3月27日建立の天草市栖本町古江「**エ**林邊又市像」で、戦後も建立は続き、昭和21年7月の天草市御領町の**カ**宮崎義高像、昭和29年7月建立の芦北町上井牟田の**⑥**上村清雄像・**ツ**上村勲像となる。
□熊本県内には、通潤橋を造作した種山石工をはじめ、多様な石工集団が所在する。天草市下浦町には「加工しやすい砂岩と良港に恵まれた」ことから、およそ300年の歴史を有する「下浦石工」の集団がある。19世紀以降は、下浦産砂岩の需要が急速に高まり、建築資材として社寺の参道敷石の提供が行われ、それは本渡「祇園橋」で結実する。本軍人像の幾つかは、**「下浦石工集団」**による造作による物である。
□日独戦争から日中戦争、太平洋戦争へと長く続く戦争で、戦死した兄弟や息子への慰霊、天草地域を中心とした祖先・先祖への崇拝、これらの姿を通して**「軍人像達の平和への願い」の聲**が聞こえる。

Ⅵ　まとめ　「平和のバトン　未来へ　～身近で、自分事の平和継承～」
「戦後81年」、「昭和100年以降」で、歴史へ移行する分かれ目の時代

(1) 地域に残された近現代遺跡の保存、資料のアーカイブズ化と公開・利用

□「物（戦争遺跡・遺構・遺物）」と「紙資料（写真・新聞他）」との複合化

(2) くまもと戦跡ネット「出前平和講座」で平和を継承する!!

□拠点地域‥‥　有明中学校、大豊小学校、玉名町小学校、睦合小学校、大野小学校　等
□県内各地‥‥　菊水小学校、合志楓の森小学校、熊本学園大付属中学校等

(3) 戦時資料貸出キット「子どもたちの見た戦争　第一弾・第二弾」で啓発する!!

□第一弾　①ちいちゃんセット、②一つの花セット、③軍国少年少女セット、④勤労動員セット、⑤金属代用品セット
□第二弾　⑥隣組と国防婦人会セット、⑦空襲に備え警防団セット、⑧子どもの遊びセット、⑨オキュパイドジャパンセット
□県下諸学校・各職域団体への貸出し　　※くまもと戦跡ネットHPを参照ください!

(4)「フィールドワーク（ダークツーリズム）」を通して、平和と戦争を学ぶ!!

□現地学習「ダークツーリズム」の視点　戦跡や被災地等を観光対象として
□**「人類の悲しみを継承し、亡くなった方を共に悼む旅」**として、既に国際的に定着した概念
□日本が近代化する過程での「ゆがみやひずみ」が如実に現れた地域であり、**近現代史を多面的に学ぶことができる文化遺産**
□日本では、**広島・長崎の被爆地や沖縄戦跡**への、小・中・高校生の修学旅行や一般の方々の学ぶ旅行としても定着



(5)「平和のバトン　未来へ」継承に向けて

□ウクライナ戦争と重なる「太平洋戦争」と「熊本の空襲」の姿
特別軍事作戦＝満州事変、SNS＝プロパガンダリーフレット、捕虜＝戦時捕獲搭乗員　他

□史実に込められた「歴史の重み」、昭和の歴史の教訓化、「新しい戦前」
□あらためて「加害と被害」の諸相を、県内事例から調べる!　証言を重ねる!

□一人ひとりが戦争遺跡・遺産と向き合い「語り手」「継承者」として語り継ぐ
①戦争遺跡の調査、保存、継承・活用
②戦争遺跡・遺産は、貴重な歴史資料として「国民共有の財産“文化財”」
③庶民の戦時資料の調査と継承は「地域協働の平和学」
④広島「被爆体験伝承者」と長崎「平和案内人」による「非当事者による語り」の展開

□地域の特性を基にした熊本・上天草の「血」と「智」の姿

連　絡　先
くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク　代表
戦争遺跡保存全国ネットワーク　全国運営委員
平和憲法を活かす熊本県民の会　代表幹事　　髙谷　和生
Ｅメール　takayanagi912@yahoo.co.jp
ＨＰ　ＵＲＬ　https://www.kumamoto-senseki.net/